しあわせ

8　月　号

妙土広大超数限（みょうどこうだいちょうしゅげん）
本願荘厳よりおこる（ほんがんしょうごん）
清浄大摂受に（しょうじょうだいしょうじゅ）
稽首帰命せしむべし（けいしゅきみょう）

（『浄土和讃』三四）

数量を超えた広大な阿弥陀さまのおさとりの境界は、一人ももらさず救うという本願によってひらかれている。清浄にしてすべてを摂めとる阿弥陀仏に、お敬いをささげ帰依すべきである。

（意訳）

稽首…頭を地につけて礼拝すること。五体投地のこと。

「手を合わす母」

コロナ騒ぎであっという間に早や、お盆。お盆を超えればどんどん日も短くなってゆく。お盆はウランバナーといい、逆さ吊りの苦しみを表す言葉である。

今年も後、四か月余りと残り少なくなるこの時期に、先だった方々への感謝とご供養の思いを表現する大切なお盆を迎える。「おかげさま」という思いを御報謝という形で表現するのは人間だけのいとなみである。

初盆なのに密集を避けねばならないため家族や親戚が集まれないご家庭も多い。

人間が地球上を我が物顔に占領し、様々な生物を絶滅に追い込んだ報いであろうか？目に見えないウイルスが自然を代表して人間に攻撃を仕掛けているかのようでもある。

人間の思い通りにはいかないのが自然である。ウイズコロナ、コロナと共生する道を模索するしかないのもしれない。

法座案内

盆会法要

八月　七日　昼席・夜席
八日　昼席

講師　海谷真之師（江田島市光源寺住職）

※本堂内は二四時間換気をしておりますが、お参りの際はマスク着用をお願い致します。

法味の会　ーご和讃の味わいー

八月はお休みです

府中町山田二丁目二十五十三
栢原山　龍仙寺
電話（〇八二）二八二十四八二三

【ご和讃をよむ㉗】～きわみなき慈悲～

「いち、じゅう、ひゃく、せん、まん、おく、ちょう、けい、がい・・・・ごく、ごうがしゃ、あそうぎ、なゆた、ふかしぎ、むりょうだいすう！」

幼いころ、姉弟三人で肩までお風呂につかって数の単位を暗唱していたことを懐かしく思いだしながら、この原稿を書いています。インドの人々は昔から数に強いことは有名ですが、インドには恒河沙（ガンジス河の沙の数ほど）など途方もなく大きな数の単位があり、お経にも、それらの単位によって浄土のありさまが説かれています。たとえば阿弥陀さまの身長は「六十万億　那由他　恒河沙　由旬」と説かれていますが、那由他は十の六〇乗、恒河沙は十の五二乗、由旬は約七キロメートルですから、まったく想像がおよびません。また阿弥陀さまのおさとりの場である道場樹は七つの宝で飾られており、高さは「四百万里」と説かれています。一里を四キロとすると一六〇〇万キロにもなります。地球から月までが三八万キロですから、とてつもない大きさですね。しかし、親鸞さまは今回のご和讃において、真実の仏さまは数量を超えていると讃えられ、一首前の三五首目では「七宝講堂道場樹　方便化身の浄土なり」とあり、たとえ想像できないほどの大きさでも、数量をもって説かれているかぎりそれは真実の仏ではないと言われています。これはどのようなおこころでしょうか。

幼なじみの隣寺のご住職から、「一センチも一キロもおなじ」というお話を聞かせていただいたことがあります。娘さんがまだ乳児であったころ、坊守さまがおっぱいをあげるのをじらしつつ微笑んでおられたそうです。だっこしながら、おっぱいにあと一センチというところで止めるのですね。赤ちゃんはハフハフおっぱいをさがすそうですが、なんとも愛らしいその姿に微笑みつつ、赤ちゃんは最後のわずか一センチも自分では埋められないのですね、とお話されていました。

赤ちゃんは、どんなにおいしいご馳走があっても、食べられません。かむことも、飲みこむこともできないからです。たとえ飲みこめても、消化できません。だからお母さんは、赤ちゃんにかわってバランスよく食べ、それをお乳にかえて、赤ちゃんに与えます。お母さんのお乳は本当によくできており、栄養バランスも温度も、おそらく味も、赤ちゃんにとって完璧です。しかし、たとえお乳ができていても、お乳が出るから飲みにおいで、という話は通じません。わずか一センチでも、赤ちゃんからはそのすきまを埋めることはできないからです。自分で埋められないかぎり、赤ちゃんには一センチも十キロもおなじ。お乳をくわえさせるところまで、すべて親の仕事でした、というお話でした。仏さまが数量を超えているとは、ここだと思うのです。

妙土広大超数限　本願荘厳よりおこる
清浄大摂受に　稽首帰命せしむべし
たとえ六十万億　那由他　恒河沙　由旬

というとてつもない大きさであっても、数量によって限られているならば、なおそのすくいの手がおよばない世界は残るでしょう。どんな易しい条件であろうとも、たった一つでも条件がつくならば、救われないものが残るでしょう。だからこそ阿弥陀さまは、限りなき御身となられました。どれほど深い迷いに沈んでいようとも、どれほど重い罪を抱えていようとも、いかなる愚かな凡夫であろうと、もらすことなく救いとるために、ひかりといのちきわみなき仏となられました。阿弥陀さまは数量を超えている。それは、この身がもれようがない、ということなのですね。